覚書

満州佐伯村おぼえ書（十四）

〈第十次 昌図佐伯開拓団小史〉

会員 矢野徳弥

五、日々是好日〃東の間の平和

営農の安定は、団員達の将来に、大きな自信と希望を与えた。かつては、三反か五反の貧しい百姓であったものが、今では曲りなりにも水田一町四反歩、畑七町歩の所有者になり、米にして少なくとも五十俵以上、雑穀を加えると、百俵を越える供出する身分に変ったのである。

昭和十九年中は、佐伯開拓団にとって、まだ戦争が非常に遠い存在のように感ぜられていた。この年徴兵検査を受けた壮丁達も、殆んどがまだ団に居たし、団員達に対する召集も少なく、また幸いなことに、団員の応召者にまだ一名の戦死者も出ていなかった。

まさに、嵐の前の静けさを思わせる、平和で幸せな一時期が、若開四年を経た佐伯開拓に訪れていた。

この頃の生活を、本部の動きから紹介しておこう。

前年までの入植者が、すべて自立経営に移行した現在、忙がしいのは、新団員担当の守永指導員ただ一人であった。ひところの劇務から解放された本部では、じっくりと新しい村造りの検討を進めていた。これから必要なのは、農道網の整備と、薪炭林の造成、それに果樹の導入と、副業としての養豚の拡大であったが、それは、息の長い課題でもあった。

団長は、時間があれば必ず部落に出掛けた。一戸一戸訪ね、家族の安否をたずね、作物の出来ぐあいを聞き、また将来の希望を聞いた。訪ねると、たいてい食事が出て、時には白酒の接待を受けることもあった。夕方になると、御の遅い月毛（全身白毛）の蒙古馬に乗り、満足そうな顔をして、本部に帰る姿が見受けられた。たれかこの馬に「白雪号」（天皇の乗馬の名）と名付けていた。

農場には月に三回位出掛けたが、重要事項の決裁は本部で行なった。

学校には、月に数回行った。毎月八日は、団員（男子）の全員集会日で、毎月十日が婦人の集会日であった。この会合では、主として戦況の説明を行ない、その必勝の決意を促すとともに、二宮尊徳の「報徳」について説くのを常とした。

学校は、この頃生徒数が百名近くに増えていたので、三人の教師の外に、報国農場隊員の中から、北節子（西国東郡田染村）を廻してこれを助けさせた。

十九年に入ると、団を訪ねてくる人達の数が、急に増えはじめた。

一つは、報国農場が県営であるため、内地から県関係者の出入りが多くなったことによるが、満州国内からの文化人や、新聞記者の来訪も増えてきた。理由は、モデル開拓団を見たいということであったが、口の悪い団員は、食漁出張と呼んでいた。

来訪者は、たいてい本部宿舎か、幹部の自宅に泊め、豊富な肉料理と白酒で歓待したが、帰りのリュックサックには白米の包みを入れることも少なくなかった。「幼年倶楽部」に「タンクタンクローリ」のマンガを連載して人

気のあった坂本牙城も、満州日報の記者としてよく来団したが、当時、これほど食糧にゆとりがあり、また、これほど人情の良い開拓団はなかったという。

団では来訪者だけでなく、日頃何かと世話になる新京の政府関係者の何人かにも、随時食糧を届けていたようである。

（なお、この覚え書を書いている私も、団長の家族として団にいたが、父は厳格な方で、来客の都度、その分だけの米を購買部から受領してきて、妹に炊かせていたようである。通常私達も団員達と同じく、三割粟入の高粱飯を常食としていた。ただ、家畜の往診にゆくと、そこで白米の飯に出会わすのでありがたかった。）

団長は、現地の人達を非常に大切にした。結婚式や、葬儀にもよく出席したが、時にけんかの仲裁に雇われることもあった。現地人のけんかは暴力は振るわない。路上に出て、互いに相手の非を、取り囲んだ大衆に訴えるのである。呼ばれると、双方の言い分に耳を傾け、やがて、どちらが悪いかを理由をつけて裁定する。大衆が拍手でこれを支持すると、けんかは終りとなるのであった。

雨が降ると、団長は近くの怪萬貴の家で、現地の農夫達に、吉川英治の「三国志」を読んで聞かせた。勿論、本部勤務の高の通訳付きであった。

まことに悠容として「日々是好日」の生活であった。

なお、名前の出たところで、萬貴と団長の関係に触れておこう。団も事業体であったので、時折り資金繰りに困ることがあったが、いつでも怪萬貴が用立ててくれた。当時、満州では、日本・朝鮮・満州と、三国の紙幣が流通していたので、五千円も借りると、雑然と不揃いで、かなり厚味の金を差し出されたが、団長は、これを数えて受け取ることをしなかった。返済のとき相手側も同様である。勿論、借用証など不要であった。理由を聞くと、矢野は我的朋友だから、と答える。中国社会における信頼の重みを教える出来事であった。だから戦に破れ、いよいよ現地を離脱して昌図駅に出るという前夜、彼が、山口・最上と離れ、単独で自分の誘導に従うようと言って来たとき、善意か？　陥穽か？　非常に判断に迷ったが、団長は、萬貴の言を信じ、団員の運命を任せたのである。

結果は、佐伯開拓団のみ、土匪の襲撃を受けることなく、無事、昌図駅に脱出できたのである。こんにちでは、彼が中共の影響下にあった大者だったという見方が強い。

（三浦（一）・高島義太郎・倪玉環等の意見）

六　周辺の情勢

このように、佐伯開拓団で、束の間の平穏を楽しむかに見えた頃、西側の堤防を越え、遼河の支流を渡り、一歩足を七家村に踏み入れると、そこには、満州国の威令など無きにひとしい、昔ながらの中国農村の社会があった。もともと、この地区には、開拓団の入植で土地を追われた人達が移り住み、対日感情も良くないことから、団員の立入りは禁止されていたが、転業で入った某が、秘かに賭博で出入りしていた。その某の話によると、

「村人達は、三重の税金に苦しめられている。一つは関東軍（満州国の意）に、一つは蔣の国民政府に、そしていま一つはパーロー（共産八路軍）に――」というのである。

賭博は、白昼堂々行なわれていたが、特に、盛大なのは、月に一、二回やってくる女頭目が張るときで、二十名位の騎馬隊を率いて風の如く現われ、派手に勝負した後、あっという間に雲の如く消えていたという。土匪の一派にちがいない。

夜になると、大樹の彼方で、しばしば銃声が聞こえた。現地人の話によると、地主（ヒトシ）の家が襲われて、馬が盗まれているのだという。七家村は鉄道沿線から五十キロ、警察署のある室力鎮から十五キロの村である。

これが建国十二年を経過した、王道楽土の実態であった。

七　獣疫の脅威

順調な歩みを続ける佐伯開拓団にも、大きな波きどころがあった。ここが、各種家畜伝染病の常在地であったことである。

中でも、豚コレラの存在が最大の脅威で、四季を問わず、年に何度も発生し、たいてい二つ以上の部落に暴威を振るって、通常十日位で終息したが、その都度数十頭の、主として六か月以内の幼豚が斃死するのであった。ただ、幸いなことに、この伝染病に予防ワクチンがあったので、十れ年に入ってからは、精力的に予防接種を行ない、団員農家の畜舎では、ある程度の発生抑圧に成功したが、周辺の現地人農家で絶えず発生、流行を繰り返し、大きな脅威であった。甚だしいときには、開拓道路の両脇に、いたるところ、放牧豚の死体が見られたのである。

豚コレラに次いで脅威であったのは、馬の鼻疽である。通常は数か月から、数年にわたる慢性経過をとり、膿の混った鼻汁を出すのが特徴であったが、免疫性の全くない若齢の日本馬がこれに罹ると、急性の経過をとって、僅々、一週間か十日足らずで斃死するのである。十九年に入ってから、柳井久伝（来門）の馬を皮切りに、三頭が斃死したが、いずれも、軍用移植馬であったため、軍に対するその申し開きが、また、大変であった。

このあと、急いで全団員の馬を、マレイン点眼という方式で検査したところ、その三十%が陽性反応を示したのである。この検査が終了して数日の後、内地から暴の家畜防疫担当者二名（佐藤一雄・村上武男の両技師）が視察にやって来たが、便に利用した大車を曳く馬が、二頭とも膿性の鼻汁を出していて、明らかに鼻疽の罹患馬であった。これを見た二人は驚倒せんばかりであった。その上ゆく先々の路傍には、豚コレラの死体が到るところ転がっていたのである。

「なぜ、罹患馬をすぐ殺処分しないのか」と、二人は本部関係者に質した。しかし、もし言われた通りにするとしたら、団は百頭近い馬を処分しなければならぬ。すると、たちまち農耕が行き詰まってしまうだろう。補償金のめどは全くない。遺憾ながら、ここは鼻疽の常在地なのである。

家禽ペストもまた、恐るべき病気であった。一時間ぐらい前まで餌を食べていた雞が、突然ポトリととまり木から落ちる。近づいて見るともう死んでいる。とまり木にはまだ元気な雞がいる。するとしばらくしてまた次の雞が落ちる。また死んでいる。こうして甚急性出血性敗血症の病型をとり、次々と雞舎を侵襲してゆく。昭和十九年の暮れには太平山に発生したが、病気は三日で終息した。全滅したからである。原発地でないと、このように猛烈な病疫に出くわすことは、先ずあるまい。

ただ、豚コレラにしても、家禽ペストにしても、常在地だけあって、抗体を持った個体が多いのか、流行の範囲が非常に狭く、かつ、急速に終息するのが特徴であった。

ところで、昭和十九年という年は、家畜にとって余程不運の年であったと見え、暮れ近くになって導入したば

かりの朝鮮牛に流行性感冒が発生し、一か月足らずの間に十頭ばかりが死亡し、また雌雄牛のほとんどが流産してしまった。しかも、朝鮮牛は主としてこの年入植した新団員に渡されていたので、その被害は特別に深刻であった。

依佐間拓団の地域では、この外に豚疫もしばしば発生したが、これは大てい一畜舎止りに終っている。

以上の家畜伝染病の流行は、防疫の徹底した日本内地で、どうでい想像することのできぬものであったが、それにしても、毎年、これだけの被害を出しながら、馬も豚も、いっこうに減少き見ないこそ驚ろきであった。

（つづく）

伝承物語

切畑山と水が谷

前江所竹野浦河内
吉田勝（八五才）

昨年ご一報した戦前の大野郡小野市村字田代の共通地、「切畑山の話」はどうなりましたか。私が十五才の時、その切畑山の山小屋に半期仕事に行っていた時、ところの老人から聞いた話で、人名などまったく知れません。

平家直系の女が姙娠の身を家来夫婦に守られて、隠れ住んだところが切畑山で、生まれた子供は男の兒であったそうです。なにしろ源平の合戦の頃のこと、落武者伝説の類です。

当時は田代方面・水ヶ谷（スイガタニ）共全く通りのないところ、猟（かり）人ですらほとんど知らないほどの山里で、切畑山は水ヶ谷の北に当たり、重岡方面からだと山の尾根をたどって二里ぐらい、山の七、八合目の位置で、飲料水にも困るだろうと思われる所です。それでも、一町歩ほどの水田がくぼ地にあり、その名の通り切畑があちこちに開かれていました。私がそこに行ったのは今から六十六年前のことで、当時はまだ石碑や小さな神社もありました。

耕作地はまだ面影はありましたが、畑は廃耕して十年ぐらい、水田は廃耕して五年もたっていましたろうか。人家は全くありませんでした。もと住んでいた人達は今宮崎県の北川方面に転出していると、其の当時を知る老人は話していました。

その老人の話では、落人は壇ノ浦に敗れた平家方で、皇室にゆかりある女性、腹身の家来夫婦にまもられてこの切畑山に隠れ住み、男兒を産み、ひそかに育てあげ、家来から文武の道を教えこまれて、再び世に出ることを心がけていたが、源平時代は終りを告げてしまった。

水が谷は、秘密の里その切畑山の麓に当たり、同行逃避した家来の一部が住みつき、切畑山の秘密を厳重にまもっていたという。

また、そんな時代、里子を嫁にする場合、ここ水ヶ谷に一時雲隠れさせた所ともいわれ、深山で吸（きゅう）こまれるように姿をかくす谷ということで、吸が谷と呼ばれていたのが、今は水が谷と書くようになったという。

それにしても、切畑山の伝承のこの山里で生まれ育ったのは誰であったか、その後どんな歴史が続いたか。また別に聞いた話であるが、一夜にして吸い殺されたという妖気につつまれた吸が谷の物語、妖怪変化の伝承など、そのほか奥山なるがゆえのいろいろな伝承き知りたい。

宇目町史談会の方々から、しらべてまとめてほしいものです。

（おわり）

（おことわり）吉田老から貰った二通の手紙を要約してまとめました。つけ加えた点も少々ありますが、おゆるし下さい。（羽）